

平成20年度 第1回岩手県立総合教育センター運営協議会 会議要旨

I 日時 平成20年9月30日（火）10:00～12:10

II 会場 第1研修室

III 出席者 平澤委員、篠田委員、遠藤委員、佐々木委員、新妻委員、樽松委員、高橋委員、
内澤委員（菊池委員、及川委員、藤田委員は欠席）
県教委学校教育室 宮学校企画担当課長、総合教育センター 所長及び所員

IV 次第

1 開会（澤田企画総務部長）

2 所長挨拶（藤原所長）

- ・今年度、新たに、大新小学校長平澤先生を委員としてお迎えした。
- ・今年度は、研修講座として106講座を開講している。学校現場の活用度の向上を意識した「現場に役立つセンターづくり」を推進している。
- ・センターの運営改善に役立ててまいりますので、忌憚のないご意見をお願いしたい。

3 会長挨拶（新妻会長）

- ・昨年度出された意見等が、これまでのセンター運営に相当反映されていると思う。本日皆さんからいただいた意見を後期の運営に反映させていただければありがたい。

◎ **委員紹介**（澤田部長）

◎ **自己紹介**（宮学校企画担当課長、中川部長、及川部長、佐藤卓主任研修主事）

4 協議

(1) 平成20年度総合教育センター事業について

ア 経営計画について（藤原所長）

- ・今年度は、「現場に役立つセンターづくり」を推進することを目標としている。
- ・センターの敷居の高さを払拭するため、現場の目線でさまざまな改善をしてきた。
- ・来年度から、職名を変更して所員のモチベーションを一層高めたい。
- ・運営協議会資料を薄くし、その分映像を見ていただくように改善した。

◎ **運営方針の具体化とこれまでの実績について、映像によるプレゼンテーション紹介**

- a 講座中締め方式による研修者のフォロー
- b どようび研修支援事業
- c 出前授業の奨励（情報モラル授業、小規模・複式、免許外、理科実験指導、教育相談、特別支援教育）
- d 施設・設備の有効活用（地元小中学校の理科授業、星空観測会、体育館開放）
- e 本庁と一体となった業務の推進（Gベースのネット配信、免許更新予備講習）

- ・免許更新予備講習は受講者から高い評価を得ている。来年度は中・高校も視野に入れながら計画し、岩手大学や県立大学と連携して、質の高い講習にしていきたい。

イ 研修事業について（中川研修部長）

- ・今年度の特徴は、①基本研修の内容充実（すべての基本研に「岩手の教育ビジョン」開講、5年研は教科指導を充実 等）、②学力向上への対応（JSTと共催した講座の実施 等）、③今日的教育課題への対応（小学校理科支援員研修講座等の新規開講 等）である。
- ・8月までに終えた67講座、研修者1,790人のアンケートによるA評価の割合は74.7%（昨年度最終71.2%）であった。
- ・随時研修、要請研修とも、昨年度同期よりもかなり研修者数が増加している。

ウ 支援事業について（及川支援指導部長）

- ・教育相談については、所員が現場に出向いてコンサルテーションを行うなど、できるだけ多くに対応できる体制を整えている。
- ・メールマガジンに毎月トピックを掲載し、情報発信に心掛けている。個人登録は約80名。
- ・英語・数学の訪問指導は昨年度よりも訪問回数を減らし、各学校での授業研究等で得た先生方の強み弱みなどを講座の内容に反映させている。

エ 研究事業について（中川研修部長）

- ・研究事業の大きな目的は、県の喫緊の教育課題を調査研究し、有効な解決方策を明らかにして、その成果を先生方に普及させることである。
- ・センターの研究は、現場では分かりにくいという意見が強かったので、従来の仮説検証型の研究以外にも多様な型の研究にも取り組み、成果の現場での活用を図っている。

（2）平成19年度第2回運営協議会における意見に対する説明（佐藤卓主任研修主事）

1 研修講座について

【委員からの意見】

- ・管理職研修等は、教員の使命感を高めるよう、講師の人選には留意すべきである。

<センターの考え>

- ・講座の内容によっては、民間の企業経営者に講師を依頼する場合もある。
- ・センターが行う管理職研修では、管理職の資質と実践的指導力の向上をねらいとし、教育関係者を講師として人選するようにしている。

<20年度事業への反映>

- ・小中新任校長研修講座は、以下の内容で行った。
「県教育行政の課題」（県教育長）、「管理職としての心構え」（小中学校人事担当課長）、「指導行政の課題と学校経営」（義務教育担当課長）、「経営ビジョンづくりと共有化」（グループ協議及び小中学校人事担当課長、主任経営指導主事）等

2 新学習指導要領について

【委員からの意見】

- ・学習指導要領が改訂されても変えなくてもよい大事なものがある。センターではそこを研修で

教えて欲しい。

<センターの考え>

- ・新しい学習指導要領でも「生きる力」の理念は変わらない。学力とは、知識や技能だけでなく、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力まで含めたものであり、このことは、学習指導要領改訂においても変わらない。
- ・今回の改訂では、特に、思考力、判断力、表現力を育むために「習得・活用・探究」という学習活動を取り入れた授業改善が求められている。

<20年度事業への反映>

- ・研修講座や研究内容に、「習得」「活用」「探究」の学習活動を単元や単位時間の学習過程に位置づけ、どのような活動をさせ、どのように見取れば、思考力、判断力、表現力が育まれるかという授業改善の視点を盛り込んでいる。

3 教育相談件数の変化について

【委員からの意見】

- ・教育相談件数が減少したのは取組の後退ではない。減少した背景を考える必要がある。

<センターの考え>

- ・ご意見の通り件数が増減した背景を考える必要がある。教育相談では件数が増加する傾向にあり、特に、沿岸部の支援を強化する必要があると考えている。また、発達相談では、特別支援学校が地域のセンター的機能を果たすように位置付けられたこととの関連がある。

<20年度事業への反映>

- ・早期対応を必要とするときに支援できるよう、学校からの依頼に応じて学校に積極的に出向き、コンサルテーションや相談を行っている。

(3) 質疑・意見交換

【樽松委員】

- ・教育相談は単に相談で終わるのか。相談内容の傾向や児童生徒の兆候など、相談者に有効な資料の提供はしていないか。

<佐藤一也主任研修主事>

- ・相談事例からの学びを、現場に還元すべきと考えている。研修講座のテキストに反映させているほか、昨年度、事例に則した手引きを作成した。今年度も充実させていきたい。

<吉田主任研修主事>

- ・特別支援教育でも個人情報に留意しながら、研修講座等で事例を紹介している。事例に対する回答など、具体例を知りたいという要望は多い。

【遠藤委員】

- ・今までにないようなセンターの新しい取組はありがたい。一方で、これまでの仕事の仕組みや業務の在り方について調整した点はあるか。

<藤原所長>

- ・新しい試みは、動くまでは仕事は増えるが、その分無駄を省き、業務量を減らせるところは減らすようにしている。(研究発表会の申込処理のIT化など)
- ・この業務は今が旬というものもあり、時期を外さないために行っているものもある。その

点では所員に苦勞をかけている部分はある。

- ・基本的に、所員からの内発的な声に応じて行っており、健康管理には十分配慮している。

【遠藤委員】

- ・新しいことをやる時に、教育事務所や市町村と重複する部分はないか。

＜藤原所長＞

- ・事務所の繁忙時期に出前講座を提案するなど、各教育事務所から了解を取って実施している。互いにより関係を築きながら連絡を取り合って進めている。

【平澤委員】

- ・要覧には15年研修がミドルリーダー養成となっているが、15年研修者は若手という職員構成の学校も多い。現状にあった研修体系となるように見直す必要がある。
- ・平均年齢の高い学校の先生方のモチベーションをいかに高めるかが岩手の教育課題である。そうした観点からの教員の資質向上の講習も必要ではないか。

＜藤原所長＞

- ・大阪では、退職した先生をセンターで雇い、大量採用した若手教員の相談に応えるなどの対応をしているという。初任者研修も5回も6回も行っているそうである。
- ・研修体系の見直しについては、現在本庁と話し合っている。15年研修や10年研修は、免許更新講習に代わっていこうという見通しを持っている。
- ・免許更新講習では、基本的な内容と各年齢層に応じた内容に分けて実施する必要がある。

【議長（新妻会長）】

- ・年齢に応じた研修体系の検討は必要である。免許更新講習との兼ね合いで、岩手にふさわしい研修の仕組みを模索しながら、体系について考える議論となっていくだろう。

【篠田委員】

- ・研修内容として、すぐ役立つハウツーものと、志を高めていく基礎的なものとのバランスが問題だ。即役立つものは即役立たなくなるものでもある。

【議長】

- ・講習内容には基礎基本と応用があって、免許更新講習は基本に比重がかかっている。また、現場の具体的な課題にどう答えるかも重要であり、現場での活用を考えれば、基本と応用のバランスを検討する必要がある。

【遠藤委員】

- ・研修には教員のモラルを高めるような内容を組みにくいだろう。むしろ大学での養成段階の問題なのかもしれない。養成と研修の接続が大事だろう。

【議長】

- ・更新講習の導入で、来年度の教育学部への志望率は全国的に下がるであろう。教員になってからのモチベーションを維持向上するための研修の仕組みをどう作るのが課題である。

＜藤原所長＞

- ・免許更新講習は、多くは大学にお願いしての実施だが、岩手だけはセンターでも実施している。今後、他県でもセンター実施は増えると思われる。
- ・5日間の講習のうち、2日間は小・中・高一斉に集まって大所高所からきちんとした話を聞き、

3日間は各教科できめ細かくニーズに応える内容を行う。そして、これを次の研修へのきっかけにして欲しいという考えである。

- ・研修は本来自動的・自発的なもので、センターとしてもさまざまな情報を随時提供しながら、現場とのつながりを強化していきたい。

【議長】

- ・センター所員が出向く研修、先生方が来所しての研修、ネットでの情報発信でセンターを活用してもらえるように取り組んでいる。現場でどう活用するかがポイントだろう。
- ・メルマガ個人登録80名あまりということだが、それはどういう人か。

＜谷木研修主事＞

- ・90%は学校関係者である。

【議長】

- ・私立学校にも配信しているか。

＜鈴木主任研修主事＞

- ・私立学校にも配信している。内容的には旬でまとまった情報として発信している。

【佐々木委員】

- ・日本の先生とは違って、外国語指導助手は気軽に声をかけてくれる。英語ができない子にも声をかける。それが子どもたちには印象に残っている。
- ・子どもたちは、社会に出ると大概人間関係で挫折してしまう。教科指導とは別に、学校でコミュニケーション能力を伸ばしていくことが必要だ。

【議長】

- ・コミュニケーション能力を中心とした人間関係力をもっと大事にする必要があるということであろう。先生方自身が気軽にコミュニケーションを取れるような、先生自身の人間力を高める講座もあってもいいのではないかというお話であった。

【佐々木委員】

- ・教育センターとしてはこういう形しかないと思うが、先生方がセンター以外の研修にも出ていくことで、もっと人間力を高めて欲しい。センターで、教員のスキルアップのための研修に関する情報を紹介するのも一方策だろう。

【内澤委員】

- ・先生方は集金などの雑務もある。30人学級も実現されていないと聞いた。授業の準備だけでも忙しいのに、それでは本当に時間がなくなり、モチベーションも高まっていかない。先生方が子どもにきめ細かく対応することも厳しいだろう。
- ・教育センターの問題ではないが、先生方は、どうやって時間をつくりモチベーションを保っていくのか気になった。

【議長】

- ・センターの仕事は、先生方の一般的人間形成というよりは、専門な力をどうつけるかということに中心課題がある。センターの直接的課題ではないにせよ、市民としての先生の育成についての研修の場や機会を、情報として先生方に伝えることも必要だ。

【高橋委員】

- ・センターは世間から見ると敷居が高いが、教育センターでも新しいことに積極的に取り組んでいることを知り、今までに比べれば今日は違ったなと感じた。
- ・今、社会全体に閉塞感が漂っているが、その中でも先生方には明るく元気でいて欲しい。子どもは、先生が明るく元気だと好きになるし、先生が好きになると勉強も向上する。
- ・最近の子育てがうまくできなくて先生に頼る親が多い。特に支援事業については、誰に相談していいかわからず悩んでいる親も多いと思うので、社会にPRする方法を工夫して欲しい。

【平澤委員】

- ・今日、所長の話聞いて教育センターのイメージが変わった。しかし、研修した先生方の成果が同僚に広まらない。学校では研修成果を活用するよう管理職がPRすべき。センターでも、学校に戻ったら成果を伝えるように言って欲しい。

【議長】

- ・どなたでも気軽にアクセスできるセンターにしていくことが期待されている。
- ・センターは、先生同士がコミュニケーションを図る場を提供できる数少ない機関である。先生方の同僚性を高める仲間づくりなども含めた研修の提供も検討してほしい。
- ・コミュニケーション能力に不安のある学生も教員になる現状がある。どのように教員として育てていくか、センターとしても人と関わる力を意識的に取り上げて欲しい。
- ・委員の皆さんには、意見等があれば、随時事務局に出してもらいたい。

5 その他（澤田企画総務部長）

- ・次回は2月の開催である。

6 閉会（澤田企画総務部長）